

1. 文学部・文学研究科

I	文学部・文学研究科の	
	研究目的と特徴	・・・ 1－2
II	「研究の水準」の分析・判定	・・・ 1－4
	分析項目Ⅰ 研究活動の状況	・・・ 1－4
	分析項目Ⅱ 研究成果の状況	・・・ 1－13
III	「質の向上度」の分析	・・・ 1－15

I 文学部・文学研究科の研究目的と特徴

1. 研究の目的と基本方針

名古屋大学の研究目的は「真理を探究し、世界屈指の知的成果の創成によって、人々の幸福に貢献する」ことである。

これを人文学の分野に展開することにより、文学部・文学研究科では、「人文学の分野における深い学識と卓越した能力の追求を通して文化の進展に寄与する」ことを研究目的として設定している。また、これに基づいて、「研究成果の体系性を問い、未来に向かって持続的に知的財産を蓄積し、人文学における総合研究組織としての充実をめざす」という基本方針のもと、研究活動を推進している。

2. 目標と方針

文学部・文学研究科では、研究に関する第二期中期目標として、「国際水準の研究を推進する。」ということを掲げている。具体的には、基幹的综合大学にふさわしい学術的成果を産み出す国際的研究拠点的形成するとともに、研究成果を幅広く社会に還元することを目指している。

こうした目標を達成するため、以下のような方針に基づいて研究活動を推進している。

- (1) 中期目標・中期計画 K10:「中核的な研究拠点を形成する。」に対応した方針や取組として、グローバル COE プログラムを推進するとともに、その期間終了後に成果を継承する文学研究科附属人類文化遺産テキスト学研究センターを設置した。また、日本近現代文化研究センターを設置し、その期間終了後には「アジアの中の日本文化」研究センターを設置した。(文学部・文学研究科中期計画 K8)
- (2) 中期目標・中期計画 K11:「若手研究者を育成するための環境を整備する。」に対応した方針や取組として、日本学術振興会特別研究員への応募を支援するための各種説明会、模擬面接等を行った。また、ポスドクの研究環境を整備するために博士研究員・附属センター共同研究員の制度を設けた。(文学部・文学研究科中期計画 K9)
- (3) 中期目標・中期計画 K12:「共同利用・共同研究拠点を含む研究所・センター等の機能と活動を充実させる。」に対応した方針や取組として、文学研究科附属人類文化遺産テキスト学研究センターおよび日本近現代文化研究センター・「アジアの中の日本文化」研究センターにおける研究活動を充実させた。(文学部・文学研究科中期計画 K10)
- (4) 中期目標・中期計画 K13「質の高い学術成果を社会に発信する。」に対応した方針や取組として、紀要『文学部研究論集』、附属センターの機関誌を発行するほか、公開シンポジウム、講演会等を開催した。また、各自治体史編纂事業、社会教育活動等への参画をすすめた。(文学部・文学研究科中期計画 K11)

3. 学部・研究科の特徴

本組織では、人文学を学術基盤として位置づけ、人間の文化的、社会的、歴史的営為の諸相から人間精神の本質や基盤構造を明らかにし、これらの営みを、個別的な現象の把握と体系化との間で双方向的に理解することを重視している。また、基礎的な問題と先端的な問題、あるいは各専門分野に特化した研究領域と学際的な研究領域の双方に目配りし、研究の高度化と先端的分野の充実を通じた研究拠点の構築、研究成果の還元による地域社会との連携、研究の国際化を図っている。

かかる理念に基づき、人文学の各分野の研究者をバランスよく配置するとともに、研究組織を継続的に整備して来ている。平成 12 年には大学院重点化を実施し、さらに学際的領域を開拓する大学院専担講座として、「比較人文学講座」を新設した。平成 15 年には、日本研究部門を一層強化し、中部地域における核とするべく、「日本文化学講

座」を新設した。平成 20 年 10 月には、日本文化学講座を中核に、日本近現代文化研究センター（MCJC）を発足させ、日本文化研究の拠点形成に取り組み、さらに平成 25 年 4 月にはこれを発展的に改組して「アジアの中の日本文化」研究センター（JACRC）を設置し、東アジアとの関係の中で日本文化理解を再構築する取り組みを行っている。

本組織における研究活動において、とりわけ特筆すべき点として挙げられるのは、テキスト研究の分野において、以下のように高度な研究拠点形成を着実に実現して来たことである。平成 14 年度採択の 21 世紀 COE プログラム「統合テキスト科学の構築」を通じて、教育研究拠点の形成を推進した。さらに、これを継承するグローバル COE プログラム「テキスト布置の解釈学的研究と教育」（平成 19～23 年度、GCOE）において、高度な教育研究拠点の形成および若手研究者の育成に積極的に取り組んだ。平成 26 年 4 月には、これらの成果を継承するために、人類文化遺産テキスト学研究センター（CHT）を設けた。

上記の「東アジア関係学」「テキスト学」はミッションの再定義にも関わる。

[想定する関係者とその期待]

文学部・文学研究科の研究活動に対する一義的な関係者としては、人文学各分野の学界や、大学教員、博物館等を含む研究機関職員などの研究者を想定している。基幹的重点大学を支える一組織であると同時に、人文学各分野の研究活動の核となるような優れた研究者の集団として、高度な学術的研究成果を多数産み出し、国や自治体等における研究機関の調査研究活動にも寄与するというところに、関係者の期待はあると考えている。GCOE に採択されるなど、これまでの実績から、関係者の期待は一層高まっていると認識している。さらに、第二義的な関係者として、学生や、知的関心を持つ社会、およびその中で教育活動に携わる初等中等教育機関の教員などを想定しており、上記のような高度な学術的研究成果に基づく知見を、さまざまな媒体や活動を通して幅広く社会に還元することにその期待はあると考えている。

II 「研究の水準」の分析・判定

分析項目 I 研究活動の状況

観点 I-1 研究活動の状況

(観点に係る状況)

観点 I-1-1-① 研究実施状況(競争的資金による研究実施状況、共同研究の実施状況、受託研究の実施状況など)

【特色ある研究等の推進】

本研究科の特色となっている研究のうち、テキスト学については、GCOE に採択されたことを基盤としている。GCOE においては、テキスト学研究における世界的レベルの拠点形成に取り組んできたが、平成 23 年度に最終年度を迎え、5 年間の研究を総括する論文集を刊行した。また、平成 24 年 3 月には、「外部評価報告書」が刊行され、ポジティブな評価を得ることができた。平成 24 年度には、日本学術振興会から「設定された目的は概ね達成された。」との総括評価を得た【資料 I-1-1、I-1-2、別添資料 I-A・I-B 参照】。さらに、平成 26 年度に、このテキスト学研究を継承発展させるべく、CHT を設置した。本センターでは、科研費基盤研究(S)「宗教テキスト遺産の探査と総合的研究」(平成 26~31 年度予定)、基盤研究(A)「古代地中海世界における知の伝達の諸形態」(平成 27~31 年度予定)を得て、(1)アーカイヴズ研究、(2)物質文化研究、(3)視覚文化研究を軸に研究を行っている【資料 I-1-3・4、別添資料 I-C 参照】。

また、本研究科は、テキスト研究と並ぶ研究戦略上の柱として、日本研究の推進を掲げており、拠点形成のため、平成 20 年度に、部局内に MCJC を設けた。本センターでは活発な活動を展開し、平成 24 年度に最終年度を迎えるまでに、「東アジア関係学」の構想に到達した。これを踏まえ、平成 25 年度以降は、これを改組した JACRC を設置し、従来の蓄積を継承発展させている【資料 I-1-5、別添資料 I-D 参照】。

このほか、日本文化学講座と並ぶ大学院専担講座である比較人文学講座は、日本有数のアフリカ研究の拠点として知られているが、アジア・アフリカ学術基盤形成事業に応募し、平成 21~24 年度に課題「伝統的生活様式の崩壊と再宗教化をめぐる現代アフリカの宗教動態」に取り組んだ【資料 I-1-6 参照】。

以上のような研究を推進する上で、本学部・研究科はフィールドワークを重視している。国内外で活発な調査活動が行われており、本研究科教員が参画した国外における調査活動は、第一期は計 62 件、第二期は計 135 件にのぼっていて、一次資料の開拓も着実に推進している【資料 I-1-7 参照】。なお、フィールドワークの重視は、第一期中の平成 18~19 年度に「魅力ある大学院教育」イニシアティブに採択された、「人文学フィールドワーカー養成プログラム」が基礎となっている。この一環として、研究科内に教育研究推進室を設けて、フィールドワークに関わるワークショップの開催などを積極的に推進している。

【学際的研究の促進】

本研究科の特色である、テキスト学、東アジア関係学の分野では、複数の学問領域が、それぞれの基礎の上に立ちながら学際的な研究活動を行っている。JACRC では、文学、歴史学、映像学、言語学など、CHT では、日本思想史、文化人類学、歴史学、美術史学など、様々な分野の研究者が参画しており、学外の研究者とも連携しながら、幅広い研究を展開している。さらに、テキスト学の対象となっている領域のうち、物質文化研究においては、考古資料の年代測定や、遺跡探査などの部分において、自然科学との学際的研究に取り組んでいる。

【社会課題】

人文学が社会的課題に貢献する分野の一つとして、文化財保護行政への寄与が挙げられる。文化庁や自治体教育委員会などと共同で、有形・無形文化財の調査研究にあたるほか、自治体等で文化財調査保護行政にあたる職員の研修に協力する等の形で研究成果を還元している(後述)。

【国際連携】

本研究科に設けた研究拠点では、積極的に国際交流を行い、共同して研究集会を開催す

るなど、連携して研究を展開している【資料 I-1-8 参照】。

【地域連携】

ミッションの再定義にもあるように、文化財調査、自治体史の編纂や、古典籍のデータベース化など、国や自治体の事業への協力のほか、地域の祭礼等への参加・協力も、地域性を踏まえた研究を推進していくために欠かすことができない責務であり、多くの教員が積極的に関わっている。諸外国の機関や、駐日大使館の活動等に対する協力実績もあり、国際交流にも寄与している。また、博物館や高校等との連携も不可欠で、活発な交流が行われている。

特筆すべき実績としては、本研究科教員が中心の「花祭りの未来を考える実行委員会」が行う「花祭りの保存・伝承による地域活性化事業」（文化庁「文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業」平成 23～25 年度）への参画がある【別添資料 I-E 参照】。

【拠点形成】

本学部・研究科では、前述のように、GCOE を継承する CHT、および JACRC が研究拠点として重要なものであり、アフリカ学研究の拠点としての機能も果たしている。

研究拠点における若手育成の取り組みとして、大学院生の業績に対して、「グローバル COE 論文賞」を設けて、高い水準の研究を促した。また、「フィールドワーカー養成プログラム」の成果を継承し、大学院生のフィールドワークに対し、助成を行っている。平成 27 年度、本研究科出身の 2 名の名古屋大学高等研究院 YLC 特任助教が本研究科を研究拠点にしているが、いずれも調査研究の基礎にフィールドワークを据えており、これまでの若手研究者育成の取り組みの成果が上っている。

資料 I-1-1 共同研究実施状況（平成 16 年度～27 年度）

経費	H16～22 年度	H23 年度	H24 年度	H25 年度	H26 年度	H27 年度
COE	2 件	—	—	—	—	—
科学研究費補助金	31 件	15 件	12 件	9 件	12 件	17 件
総長裁量経費	5 件	2 件	3 件	1 件	1 件	0 件
文学研究科プロジェクト経費	5 件	4 件	1 件	1 件	0 件	0 件
その他	0 件	0 件	0 件	0 件	0 件	10 件

資料 I-1-2 グローバル COE プログラム国際研究集会一覧（平成 22 年度～23 年度）

開催日	国際研究集会の名称
22 年 9 月 9 日-11 日	ことばに向かう日本の学知—テキスト解釈の集積としての学史—
22 年 10 月 1 日-2 日	解釈、そのまたの名は—啓蒙期における法テキストの用法
22 年 12 月 10 日-11 日	文献学と解釈学の間
23 年 9 月 1 日-2 日	歴史におけるテキスト布置
23 年 12 月 9 日-11 日	哲学的解釈学からテキスト解釈学へ

資料 I-1-3 人類文化遺産テキスト学研究センターシンポジウム・講演会等一覧（平成 26 年度以降）

26 年 4 月 19 日	開設記念研究集会「前近代社会における知の伝達方法」
26 年 6 月 24 日	公開講演会「大惣本と近世名古屋の読者」
26 年 6 月 29 日	公開シンポジウム「バルテュスとその境界」
26 年 7 月 17 日	公開セミナー ・畝部 俊也（名古屋大学文学研究科）『仏頂尊勝陀羅尼』関連の新資料について ・佐々木 大樹（大正大学非常勤講師・智山伝法院常勤講師）「特に松浦史料博物館所蔵『大倭國法隆寺所蔵貝多羅梵経』に注目して」
26 年 7 月 22 日	「城瑞別院善徳寺虫干法会調査と聖徳太子絵伝絵解き」
26 年 8 月 8 日	公開講演会「韓国・台湾における日本語日本文学の諸問題」
26 年 8 月 27～30 日	国際研究集会「宗教的身体と儀礼芸能」EATS（ヨーロッパ日本学協会）リュブリャナ大会 宗教部門パネル（スロベニア、リュブリャナ大学、ロンドン大学 SOAS、ルチャ・ドルチェ教授と共催）
26 年 8 月 31 日	国際研究集会「唱導の国際比較」（スロベニア、リュブリャナ大学、筑波大学・近本謙介准教授科研と共催）
26 年 9 月 15 日	公開セミナー・久木田水生（名古屋大学情報科学研究科）「SMART-GS プロジェクト 歴史的文献研究のためのソフトウェアシステムの開発」

名古屋大学文学部・文学研究科 分析項目Ⅰ

26年9月27日	公開研究会「イタリア・ルネサンスの宗教空間と図像プログラムを読み解く」・百合草真理子（名古屋学芸大学非常勤講師）「コレッジョと天井画 サン・ジョヴァンニ・エヴァンジェリスタ聖堂（バルマ、1520-21）を中心に」・須網美由紀（名古屋大学非常勤講師）「ジョヴァンニ・ベリーニ作、『ディレクティ祭壇画』に関する一考察 トゥッリオ・ロンバルド作、『バルナボ祭壇彫刻』とのパラゴネの観点から」
26年10月10日～11日	国際研究集会「宗教遺産学の構築」（ハーバード大学ライシャワーセンター、京都大学上島亨科研と共催）
26年10月12日	国際研究集会「日本中世絵物語の展開」ハーバード大学／名古屋大学共催ワークショップ（米国、ハーバード大学、同大学メリッサ・マコーミック教授と共催）
26年10月22日	公開セミナー 大橋秀亮（凸版株式会社）「OCRによる古文書のテキスト化を目指してー凸版印刷株式会社の取り組みー」
26年10月25日	公開講演 泉美知子「文化遺産の表象、19世紀における生成と変容ーパリ、ノートルダム大聖堂の保存、修復を中心にー」（第31回渋沢・クロード賞本賞（2014年度）受賞記念公開講演）
26年11月8日	講演会・Arnaud Brotons (Universite Aix-Barseille France)「王権と霊場ー秩序の同心円構造の再考」
26年12月5日	東京国立博物館講演会「法隆寺の聖徳太子絵伝」（東京国立博物館と共催）
26年12月13・14日	国際研究集会「東アジアの宗教儀礼」（名古屋大学／国立歴史民俗博物館松尾恒一教授科研と共催）
27年2月17日	公開セミナー・上川通夫（愛知県立大学教授）「普門寺史料の出現と愛知文化遺産」
27年3月10日	公開講演会・メラニー・トレーデ（ハイデルブルグ大学）「可変性をそなえた「フレーム」概念」
27年3月14日	公開シンポジウム「古代エジプトにおける宗教性と物質文化」
27年4月28日	公開講演会・ロベルト・ルナゴメス「メキシコの世界遺産」
27年5月27日	公開セミナー・野澤暁子「21世紀の〈村落共和国〉をめざして」
27年6月6日・7日	2015年 井波絵解きフォーラム「南砺の聖徳太子信仰と絵解き文化を探る」
27年7月4日	公開セミナー・田邊宏樹「旧人ネアンデルタール人の脳を復元して新人サピエンスの脳と比べる」
27年7月11日	公開セミナー・「聖なる場におけるイメージと「もの」」
27年8月11日	国際講演会「言葉のリズムと夢のイメージ」
27年9月12日	公開シンポジウム・「書物の王国 愛知の文庫と典籍 『愛知県史 別編 文化財4 典籍』の編さんを通して」
27年10月2日・3日	シンポジウム「日本の文化遺産としての絵物語」
27年10月9日	ワークショップ「絵解き文化への招待」
27年10月7日	公開講演会・ラモン・D・リバス「エルサルバドルの世界遺産と国際協力」
27年10月17日	城端絵解きフォーラム「日本の絵解き文化と南砺の絵解き」
27年10月31日	国際シンポジウム「文化遺産としての朝鮮通信使」
27年11月14日	公開セミナー「大モンゴル『シャーナーメ』写本の挿絵を読む」／「アイコンとアイドル：ほとけと仏像」
27年12月21日	公開セミナー「村落書物論ー民具としての書物 書物の郷（さと） 奥会津只見の聖教典籍と中世写本群ー」

資料Ⅰ-1-4 人類文化遺産テキスト学研究センター刊行物等一覧（平成26年度以降）

平成26年度	富士市立博物館 六所家総合調査会委託 『六所家総合調査報告書 聖教』（東泉院旧蔵聖教目録資料集） 名古屋大学儀礼テキスト研究会編（阿部泰郎監修） 『六所家総合調査報告書 聖教』（東泉院旧蔵聖教目録資料集）
--------	---

資料Ⅰ-1-5 日本近現代文化センター・「アジアの中の日本」研究センターシンポジウム・講演会等一覧（平成22年度～26年度）

開催日	シンポジウム・講演会等の名称
22年6月30日	講演会：間太平洋的空間における犠牲者意識ナショナルリズム
23年1月15日-16日	ワークショップ：文化の越境と翻訳
23年11月5日	講演会：上海租界劇場文化の歴史と表象
23年11月29日	講演会：東アジア近代と日本語
23年12月10・11日	国際シンポジウム「文化の越境、メディアの越境」
24年5月24日	セミナー・シリーズ「東アジア関係学の構想——越境する言語・映像・文学」 セミナーⅠ大東和重「中国人留学生の見た日本近代文学 ——研究の現在——」
24年7月24日	セミナーⅡ晏妮「冷戦下の日中映画往復」
24年11月19日	セミナーⅢ高榮蘭「偏在する「東アジア」と文学」
25年1月29日	セミナーⅣ池内 敏「18世紀日本と朝鮮の相互認識・意思疎通」
25年2月23日・24日	国際シンポジウム「東アジア関係学の構想」

名古屋大学文学部・文学研究科 分析項目Ⅰ

日	
25年5月14日	セミナー第1回伊藤比呂美「詩が語る、伊藤比呂美が語る」
25年7月1日	セミナー第2回田原「二つの言語の狭間に」
25年7月22日	セミナー第3回北村洋「『合作』と『コラボレーション』のポリティクス—戦後のハリウッド、日本、香港映画をめぐって」
25年8月8日	セミナー第4回シモーヌ・ミュラー「1930年代の文学論争と「知識人」概念の誕生」
25年10月30日	セミナー第5回エドワード・マック「ナショナル・リテラチャーの規範を逸脱する作者・読者」
26年1月25日・26日	国際シンポジウム「都市の中の外国人」
26年2月	名古屋大学・台湾大学 第1回大学院生研究交流集会
26年6月23日	セミナー第6回春名徹「漂流民の言説—異文化経験にかんする《語り》の転生—『環海異聞』『船長日記』『朝鮮物語』をめぐって」
26年7月25日	セミナー第7回秦剛「中日の知の津梁—戦前上海内山書店の精神的遺産をめぐって」
26年12月8日	セミナー第8回北野圭介（立命館大学映像学部・教授）「情報とモノ—『制御と社会』補遺」
26年1月24日・25日	国際シンポジウム「表現の不自由—自主検閲とメディア的想像力」
27年4月17日	名古屋大学・台湾大学 第2回大学院生研究交流集会
27年7月13日	「アジアの中の日本文化」研究セミナー菅野優香「美輪明宏のクィア・スターダム」
27年11月2日	「アジアの中の日本文化」研究セミナー尾形明子「『女人藝術』の人々と私」
27年11月27日	「アジアの中の日本文化」研究セミナー柴田優呼「文学が歴史を、歴史が文学を問いたす 原爆現説と日米関係」
28年1月30日・31日	国際シンポジウム「表象されること／されないこと：東アジア人文学への新たなアプローチ」

資料Ⅰ-1-6 アジア・アフリカ学術基盤形成事業シンポジウム等一覧（平成21年度～23年度）

開催日	シンポジウム等の名称
21年10月10日-11日	プレ国際ワークショップ「現代アフリカの宗教動態」
21年12月12日-14日	国際シンポジウム「現代アフリカの宗教動態」
22年7月10日	国内シンポジウム「再生としてのアフリカ、独立50年」
22年12月13-15日	国際シンポジウム「再生としてのアフリカ、独立50年」
23年3月3日	国際シンポジウム「再生としてのアフリカ、独立50年」
23年10月8-10日	国際シンポジウム「再生としてのアフリカ、独立50年」
23年11月27-28日	国際シンポジウム「再生としてのアフリカ、独立50年」
24年2月18-19日	国際シンポジウム「21世紀アフリカの創造」

資料Ⅰ-1-7 海外における調査・フィールドワーク件数（平成16年度以降）

実施国	H16～22	H23	H24	H25	H26	H27
アメリカ	4		1	2		
アルバニア					1	
イギリス	10	3	1	1	2	
イギリス、アイルランド			1			
イギリス、タイ	1					
イタリア	2		1			1
イタリア、スペイン、チュニジア、ポルトガル、モロッコ	1					
インド	2	1	1	2	1	
インドネシア						1
エジプト	2		1		1	1
エチオピア					1	1
エルサルバドル	7	1	1	1	1	2
エルサルバドル、グアテマラ		1				
オーストラリア					1	1
オーストリア				1	1	
カナダ	1					1
韓国	6	1	2	1	2	1
ギリシア			1	1	1	1
北マリアナ諸島			1			
シンガポール		1				
タイ	3	3	1	2	1	
台湾		1	1	2	3	2
中国	18	4	3	7	1	2
ドイツ	1					7
トルコ		1	1			
トルコ、韓国			1			
ハンガリー、オーストリア			1			
フィリピン	1	1		1	1	1
フランス	10	1	1	1	1	3
フランス・ドイツ・スペイン				1		

名古屋大学文学部・文学研究科 分析項目 I

フィンランド・スロバキア・ハンガリー				1	
フィンランド・ドイツ・イタリア				1	
ベトナム				1	2
マレーシア					1
メキシコ	1	1			
モンゴル		1			
ラオス	1				1
ルーマニア					1
ロシア		1			
ロシア・ドイツ			1		

資料 I-1-8 海外連携機関一覧

プログラム等名称	連携先大学等
GCOE	エクス・マルセイユ第一大学、パリ東大学、台湾清華大学
CHT	ハーバード大学、コロンビア大学、ベルリン自由大学、ハイデルベルク大学、エクス・プロヴァンス大学
MCJC	パリ第7大学、ベルリン自由大学、上海交通大学、ニューヨーク大学、南京芸術学院、ソウル国立大学、 中央研究院（台湾）、ハワイ大学、復旦大学
JACRC	ニューヨーク市立大学、国立台湾大学日本研究センター、東国大学（韓国）、デラウェア大学

別添資料 I-A グローバル COE プログラム「テキスト布置の解釈学的研究と教育」

別添資料 I-B COE プログラムオープンレクチャー実施一覧

別添資料 I-C 人類文化遺産テキスト学研究センター概要 web ページ

別添資料 I-D 「アジアの中の日本文化」研究センター概要 web ページ

別添資料 I-E 地域連携活動一覧

観点 I-1-② 研究成果の発表状況（論文・著書等の研究業績や学会での研究発表の状況、研究成果による知的財産権の出願・取得状況など）

【研究成果の状況】

第一期に刊行された本研究科教員の研究論文等は 578 編、著書は 179 冊、学会発表は 332 本であった。これに対し、第二期においては、研究論文等は 476 編、著書は 91 冊、学会発表は 372 本であった。教員数 58 人と比較的小規模の組織でありながら、多数の研究が、基礎的・先端的領域、学際的領域のいずれにおいても、継続的に公にされている点が注目される。特筆すべき点としては、人文学研究の本質的部分をなすような体系的な学術的研究成果を提示する学術的著作が多数見られることが指摘でき、継続的な研究活動が高い水準で実施されていることを示している。また、概説書、啓蒙書、教科書等、学術書や論文の翻訳、新聞記事、辞典等の編纂・執筆、マスメディアにおける取材協力など、多様な形態を通じて、研究成果を社会に還元している。【資料 I-1-9、I-1-10 参照】

本研究科の教員が代表者となっている共同研究は、第一期は計 65 件であったのに対し、第二期は計 157 件であった。また、国際研究集会を第一期は計 24 件開催したのに対し、第二期は計 37 件であった。国内研究集会は第一期中、計 71 件であったのに対し、第二期は計 87 件であった。第一期に引き続き、国内外の第一線の研究者とともに研究発表や共同討議を実施し、充実した報告書を刊行するなど、研究成果を世界に発信している【資料 I-1-2（再掲 p. 1-5）、I-1-11、I-1-12 参照】。

【社会的還元】

本学部・研究科は、東海・中部地域の人文学の基幹研究拠点としての役割も果たしており、各専門分野において、地域に密着した学会・研究会を継続して主催している。

また、人文系の学問は、一般市民の間でも関心が高い。研究科の取組としては、毎年、公開シンポジウムを開催しており、大勢の聴衆を集めている。また、GCOE、MCJC や各研究

名古屋大学文学部・文学研究科 分析項目 I

室によって、一般向けの講演会が多数企画されている。放送大学のほか、各地の市民講座やカルチャースクールに出講している教員も少なくない【資料 I-1-13、別添資料 I-B】。

資料 I-1-9 教員の研究業績

年度	論文発表数	著書数	国際会議の招待講演	受賞数
22年度	76件	8件	12件	0件
23年度	102件	15件	7件	0件
24年度	74件	13件	9件	1件
25年度	70件	26件	15件	1件
26年度	66件	15件	14件	2件
27年度	88件	14件	11件	1件
計	476件	91件	68件	5件
年平均	79件	15件	11件	1件

資料 I-1-10 学会発表件数

22年度	100件
23年度	51件
24年度	56件
25年度	61件
26年度	50件
27年度	54件
計	372件
年平均	62件

資料 I-1-11 国際／国内研究集会開催状況 (COEを除く)

年度	国際研究集会件数	国内研究集会件数
22年度	1件	7件
23年度	3件	17件
24年度	4件	13件
25年度	9件	13件
26年度	5件	16件
27年度	15件	21件
計	37件	87件
年平均	6件	15件

資料 I-1-12 研究会実施件数

学会・研究会の名称	H16～22	H23	H24	H25	H26	H27
名古屋大学中国哲学研究会	69		4			
名古屋言語研究会	82	11	11	11	11	11
名古屋大学英語学談話会	53	10	10	10	10	10
メタモ研究会	39	3	5	3		
六度集経研究会	38	9	10	10	7	
近現代史研究会	22	11	11	11	11	11
The Seminar on English Poetry and Criticism	12		3		2	
名古屋大学国語国文学会	12	2		2	2	2
名古屋大学英文学会	6					1
名古屋大学中国文学月例会	5	5	3			
名古屋平安文学研究会	12	4	4	4	4	2
西洋古典研究会	3	1		1	1	1
日本フローベール研究会	5	1	1		1	1
地域史教育研究会				4	3	1
名古屋大学中国語学文学会	2	1				
古書の会	22			12		12
動詞項構造研究会	3	2				
東海縄文研究会	1	1	1	1	1	1
名古屋大学英文学会セミナー		2				
英米文学研究会院生研究会		4		4		
「リスクと不確実性および未来についての人類的研究」共同研究会		2				
Padartha-Tattva-Nirupana 研究会		2		1	1	
東アジア関係学の構想－越境する言語・映像・文学			4			
名古屋美術史研究会			2			
考古学研究会東海例会			1		1	
歴史教科書研究会			2			
キジル科研究研究会				4		
アリコス考古学プロジェクト				2	1	

『禮記』「學記篇」研究会						8	
『荀子』「勸學篇」研究会						8	
王念孫・王念子研究会						4	
ポインティング研究会						2	
イカロ研究会						10	
1930年前後における女性作家・知識人のヘゲモニー闘争－『女人芸術』を通して							5
賢愚経研究会							1
古代地中海世界における知の伝達の諸形態							1

資料 I-1-13 社会還元活動実施状況 (件)

種別	H22	H23	H24	H25	H26	H27
市民向け講演・公開シンポジウム、カルチャースクール等	52	18	63	59	71	90
新聞記事の掲載・テレビ出演等	8	4	9	13	19	21
その他	0	0	2	0	4	4

観点 I-1-③ 研究資金獲得状況 (競争的資金受入状況、共同研究受入状況、受託研究受入状況、寄附金受入状況、寄附講座受入状況など)

【研究資金の状況】

第一期に、本研究科教員を代表者として申請し採択された科研費は、年平均約 36.8 件、71,243 千円であった。これに対し、第二期の年平均は、採択数 41 件、交付金額 89,052 千円と大きく増加した。また、特筆できるのは、第二期期間中、毎年基盤研究(S)・同(A)という大型の科研費を獲得していることである【資料 I-1-14 参照】。

研究拠点形成のため、国家的予算措置として配分された経費についても、GCOE に採択され、学内の文系の研究拠点として着実な成果をあげている。また、受託研究・寄附金等の外部研究資金の獲得にも努めている。名古屋大学内の競争的資金である総長裁量経費に採択された研究課題のうちの一部は、その後、科研費等の競争的資金の獲得につながった。このほか、文学研究科独自の取り組みとして、「文学研究科内プロジェクト経費」制度を設けた (後述)【資料 I-1-15、I-1-16 参照】。

資料 I-1-14 科学研究費補助金採択件数及び交付金額

年度	採択件数	うち基盤研究(S)	うち基盤研究(A)	交付金額(千円)
平成 22 年度	44	1	1	101,780
平成 23 年度	43	1	1	107,380
平成 24 年度	40	1	1	81,600
平成 25 年度	37	1	1	77,900
平成 26 年度	38	1	1	81,234.4
平成 27 年度	44	1	1	84,423.5

【出典：文系経理課記録】

資料 I-1-15 研究拠点形成のために配分された国家的予算措置一覧

予算区分	プログラム名	代表者	研究期間	交付金額合計(千円)
グローバル COE	テキスト布置の解釈学的研究と教育	佐藤彰一	平成 19-23 年度	160,940

【出典：文系経理課記録】

録】

資料 I-1-16 外部資金獲得状況

平成 22 年度	受託研究	富士市役所	阿部泰郎	390,000
	受託研究	特定非営利法人てほへ	佐々木重洋	100,000
	受託事業	アジア・アフリカ学術基盤形成事業	嶋田義仁	5,500,000
	寄付金	(財)市原国際奨学財団	梶原義実	500,000
	寄付金	(財)福武学術文化振興財団	羽賀祥二	1,000,000
平成 23 年度	受託研究	富士市役所	阿部泰郎	390,000
	受託事業	アジア・アフリカ学術基盤形成	嶋田義仁	5,500,000

		事業		
	寄付金	公益財団法人三菱財団	伊藤伸幸	2,800,000
	寄付金	(財) 福武学術文化振興財団	山本直人	1,000,000
	寄付金	三菱 UFJ 信託銀行株式会社	大石和欣	400,000
	寄付金	鹿島美術財団	伊藤大輔	85,480
平成 24 年度	受託研究	富士市役所	阿部泰郎	390,000
	寄付金	(財) 大幸財団	加藤靖恵	80,000
	寄付金	(財) 三菱財団	梶原義実	900,000
	寄付金	(財) 大幸財団	梶原義実	700,000
平成 25 年度	なし			
平成 26 年度	寄付金	(財) 文化財保護・芸術研究助成財団	中川原育子	400,000
	寄付金	(財) 三菱財団	釘貫亨	1,300,000
	寄付金	(財) 三菱財団	東賢太郎	850,000
	寄付金	(財) 豊秋奨学会	吉田早悠里 (YLC)	231,780 (2,000USD)
	寄付金	(財) 日本科学協会	吉田早悠里 (YLC)	600,000
平成 27 年度	寄付金	(公財) 三菱財団	池内敏	1,200,000
	寄付金	(公財) 豊秋奨学会	佐野誠子	700,000
	寄付金	(公財) 大幸財団	市川彰 (YLC)	800,000
	寄付金	(公財) 日本科学協会	市川彰 (YLC)	226,000

【出典：文系経理課記録】

観点 I - 1 - ④ 研究推進方策とその効果

【基盤的資金等の配分】

文学研究科では、基盤的経費等のうち、本学部・研究科に共通して用いる経費を除いた額を、各研究分野のユニットに、一定の指数に基づいて配分しており、これが、多くの学問領域からなる研究科の多様性を支える経済的基盤となっている。これに加え、平成 22～24 年度においては、文学部・文学研究科における中期目標・中期計画に沿った教育・研究の一層の活性化を目的として、運営費交付金の一部を充てて、研究科内から応募のあった研究課題に対して配分する、「文学研究科内プロジェクト経費」の制度を運用し、重点的な研究課題に対して、積極的な推進策を講じた。これは、将来、競争的資金を獲得する可能性がある萌芽的な研究の促進、また、中核的研究拠点の形成や若手研究者の育成を図るものであり、十分な成果を上げた【資料 I - 1 - 17 参照】。

資料 I - 1 - 17 文学研究科内プロジェクト経費採択状況

年度	代表者	金額
平成 23 年度	藤木秀朗	3,000,000
	梶原義実	955,000
平成 24 年度	藤木秀朗	2,937,576

【人事方策等】

本研究科では、教員の採用及び昇任に関して、まず人事調整委員会で関係者間の調整を行い、当該案件を総務委員会に提案した上で研究科教授会にて人事選考委員会を組織し、そこでの選考結果を研究科教授会に提案し、そこで審議するという手続きを取っている。選考にあたっては、原則として公募制を採っている。人事調整委員会は、研究科長を委員長とし、中長期的な視野に立って関係者間の調整を行う機関である。

教員の退職等による欠員の補充は、本研究科のミッションを踏まえ、学位プログラムとの整合性、学際的な研究・教育への貢献、大学の国際化への対応、社会的要請や対社会的説明責任、将来構想との関連性、博士課程前期課程全体における定員充足と教育負担の平準化、等の点に留意しながら行っている。その結果、前任者の研究教育を継承する人材を採用する場合のほか、研究科全体の見地から必要な人材を確保する場合もある。後者の具体的な実績としては、平成 25 年度に博物館学の教員を採用する人事を行った。これはミッションの再定義にも記されている学芸員養成課程の充実に関わるものであり、さらに、テ

クスト学の一部を構成する視覚文化研究、物質文化研究の推進にも寄与するものである。

【ポストドク】

ポストドク等の若手研究者の育成をはかる制度として、本研究科では博士研究員、附属センター共同研究員の制度を設けている。博士研究員は、博士課程後期課程修了者、満期退学者等、附属センター共同研究員は、科研費事業や国際交流基金などの公的なプログラムに採択されている者を対象として受け入れる制度である。このうちの博士研究員、および本研究科を研究機関とする日本学術振興会特別研究員については、紀要『文学部研究論集』への論文投稿を認めており（査読制）、若手研究者が研究実績を蓄積できる体制を取っている。

【会議開催】

GCOE や、二つの附属センターを中心に、積極的に国際研究集会等の会議を開催している。詳細は、観点 I - 1 - ②【研究成果の状況】を参照。

【情報発信】

本研究科は、毎年紀要『文学部研究論集』を発行し、研究成果を発信している。同論集は、文学・史学・哲学の3編のほか、欧文編の『Journal of the School of Letters』から成り立っており、幅広い人文学の領域をカバーするほか、国際的な情報発信にも貢献している。このほか、GCOE では研究機関誌として『HERSETEC』（和文編・欧文編）、JACRC では『JunCture』、CHT では『HERITEX』を刊行し、先端的研究について情報発信を行っている。また、教育研究推進室では、機関誌『メタプティヒアカ』を刊行しており、先述のワークショップの記録や、助成を受けた大学院生のフィールドワークの成果を掲載している。これらの機関誌は、冊子体で発行しているほか、名古屋大学レポジトリに登録しており、閲覧が可能になっている。

（水準）期待される水準にある

（判断理由）

観点 I - 1 - ①については、テキスト学については GCOE に採択されたことが重要であり、これを継承する CHT を設置し、大型科研費の交付を受けて研究を推進していることも特筆できる。もう一つの研究の柱である東アジア関係学についても JACRC を設けて積極的に研究を展開している。観点 I - 1 - ②については、論文発表数は、GCOE 最終年度にあたる平成 23 年度がピークとなっており、同プログラムの効果が大きかったことを物語る。その後は減少傾向にあるが、著書数の年平均は増加しており、GCOE 期間中の個別研究の蓄積を、著書の形で集大成する段階に至ったことを示している。学会発表数等も継続的に維持しており、GCOE、二つのセンター主催のものは研究科全体の成果として特筆される。観点 I - 1 - ③については、科研費の交付を継続的に維持しており、毎年基盤研究 (S)・(A) などの大型科研費の交付を受けていることが特筆される。また、その他の外部資金も積極的に獲得している。観点 I - 1 - ④については、研究科のミッションを念頭においた人事を行うことにより、「テキスト学」「東アジア関係学」という研究科を特徴づける研究を展開することができている。したがって、観点 I - 1 における分析結果から、期待される水準にあると判断する。

<p>観点 I - 2 大学共同利用機関、大学の共同利用・共同研究拠点に認定された 附置研究所及び研究施設においては、共同利用・共同研究の実施状況</p>
--

（観点到係る状況）

該当しない

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

観点Ⅱ-1	研究成果の状況（大学共同利用機関、大学の共同利用・共同研究拠点に認定された附置研究所及び研究施設においては、共同利用・共同研究の成果の状況を含む。）
-------	--

（観点に係る状況）

観点Ⅱ-1 学部・研究科等の組織単位で判断した研究成果の質の状況、学部・研究科等の研究成果の学術面及び社会、経済、文化面での特徴、学部・研究科等の研究成果に対する外部からの評価

【研究業績説明書】

文学研究科は多様な研究分野から構成されており、それぞれが固有の先端的研究を進めるとともに、領域横断的な研究活動を展開している。特に第二期における研究の柱は、(1) GCOE の成果を継承するテキスト学、(2) MCJC における近現代日本文化学、およびこれを継承する JACRC の東アジア関係学、(3) フィールドワーク、の3つに整理できよう。

(1) のテキスト学については、(1) 釘貫亨・宮地朝子編『ことばに向かう日本の学知』(2) 阿部泰郎『中世日本の宗教テキスト体系』(3) 松澤和宏他『テキストの解釈学』をはじめとする GCOE の成果が公刊されており、哲学・歴史学・文学等々を横断する、幅広い分野を扱っている。また、GCOE の直接の成果として、松澤和宏(1)校註・訳『フェルディナン・ド・ソシュール「一般言語学」著作集 I 自筆草稿『言語の科学』』(2) *Puissance de l'écriture fragmentaire et "cercle vicieux" Les manuscrits de l'essence double du langage*, (3) *L'ordre, le cercle, la réflexivité dans les manuscrits dits De l'essence double du langage de Saussure*, があり、文学のみならず言語学の分野でも大きな影響力を持った。また、本研究科では「テキスト」を幅広くとらえ、物質資料、芸術作品、映像、無形文化財等も含めて考えているが、映像学の分野では Hideaki Fujiki(1) *Making Personas: Transnational Film Stardom in Modern Japan* があり、美術史の分野では木俣元一『ゴシックの視覚宇宙』、伊藤大輔『肖像画の時代』がある。これら合わせて、西洋・日本をカバーする形で芸術に関する研究を展開している。これらの取り組みは、人類文化遺産テキスト学研究センターに継承されている。

(2) MCJC に関する特筆すべき研究は、坪井秀人『性が語る』である。また、JACRC に関連する代表的研究として、池内敏『竹島問題とは何か』があり、学術的意義のみならず、日韓関係を考える上で社会的意義も大きい。

(3) フィールドワークに基づいた研究としては、古尾谷知浩(1)『文献史料・物質資料と古代史研究』(2)『漆紙文書と漆工房』があり、国や自治体埋蔵文化財関係機関との連携の上での成果であるとともに、かかる機関に成果を還元するものともなっている。同じく歴史学・考古学の分野の業績として、周藤芳幸『ナイル世界のヘレニズム』があり、これは長年にわたるエジプト現地踏査に基づく成果の集大成である。また、フィールドワークに関係が深い文化人類学の分野では吉田早悠里『誰が差別をつくるのか』があり、差別の問題を扱ったものとして社会的関心も高い。このほか、佐々木重洋「花祭の保存・伝承による次世代継承および地域活性化事業の遂行と地域連携の推進」は奥三河の花祭りを対象としたのもで、無形文化財の保存や地域振興の面で大きな役割を果たした研究である。

以上のように、文学研究科を代表する研究業績を通覧すると、上記の3つの柱と密接に関わりながらも、多様な分野にわたって業績が蓄積されていることを示している。

【外部からの賞・評価、分析】

坪井秀人『性が語る』が平成25年に第4回鮎川信夫賞を受賞しているほか、SS・Sに選定した業績はいずれも権威ある学術雑誌の書評において高く評価されている。

（水準）期待される水準にある

（判断理由）

文学研究科のミッションの再定義にも関わる、テキスト学、東アジア関係学、フィールドワークという3つの柱において、文学研究科を構成する各分野の研究者が、それぞれ固

名古屋大学文学部・文学研究科 分析項目Ⅱ

有の方法論に基づいた先端的な研究業績を刊行するとともに、領域横断的な研究も行っている。これらの業績は、学界において、書評などにより高く評価されている。また、国や自治体の文化財保護行政等に対して多大な貢献をしているものもある。したがって、観点Ⅱ－1における分析結果から、期待される水準にあると判断する。

Ⅲ 「質の向上度」の分析

(1) 分析項目Ⅰ 研究活動の状況

【重要な質の向上／質の変化があった事項】

第二期は、第一期から継続する取り組みを総括し、新しい段階へ進んだ時期と位置づけられる。第一期に始まった GCOE は第二期中に最終年度を迎え、「設定された目的は概ね達成された」との評価を受けているが、これをさらに継承発展させる CHT を設置し、より幅広い領域をカバーする形で成果を挙げつつある。また、第一期に設置された MCJC も最終年度を迎え、この中で到達した「東アジア関係学」という方向性を発展させ、JACRC として改組された。

この両者がそれぞれ「テキスト学」「東アジア関係学」の研究を主として担っており、ミッションの再定義にも記された研究科の柱を構成している。また、基盤研究 (S)・(A) などの大型科研費の交付を受け、研究を推進していることも重要な成果である。

このほか、フィールドワーカー養成プログラムは、第一期から続く教育プログラムであるが、第二期は国外フィールドワーク件数が倍増するなど、研究面でも高い水準に到達している。

(2) 分析項目Ⅱ 研究成果の状況

【重要な質の向上／質の変化があった事項】

GCOE の研究成果を総括するものが、『テキストの解釈学』(水声社、平成 24 年 3 月) である。思想・哲学・歴史学・文学・言語学といった多様な分野の研究者が、テキスト学という一つの方法論の下に論文を執筆し、一書にまとめたもので、同プログラムが日本学術振興会から「設定された目的は概ね達成された。」との総括評価を得たことに貢献している。また、同プログラムの終了後、著書数の年平均は増加しており、プログラム期間中の個別研究の蓄積が、著書の形で集大成される段階に至っている。

このほかにも、各教員が文学研究科の研究の柱である「テキスト学」「東アジア関係学」「フィールドワーク」にかかわる研究に取り組んでおり、それらが成果を上げていることは、各プログラム・研究センターに関係する教員が公刊、公表した著書・論文・映像記録等が組織を代表する研究業績となっていることで証明されている。こうした活動を維持するため、科研費をはじめとする競争的資金の獲得も盛んに行われており、大型の科研費を継続的に得ていることに表れている。また、若手研究者の育成も進んでおり、YLC 助教の業績が組織を代表する研究業績に含まれることも、その成果の表れである。

なお、第一期と比較すると、論文数の年平均の数字だけに着目すると、一見、第二期は業績数が少ないようにみえる。しかし、学会発表数、共同研究主催数、国際・国内研究集会開催数はいずれも大きく増加しており、個人の論文よりも、共同研究、学際的研究の方に重点が移っていることがうかがえる。

また、ミッションの再定義にも記されている地域貢献の面では、文学研究科教員は『愛知県史』をはじめとする自治体史編纂事業に参画しており、社会的貢献度の高い成果物が刊行されている。